

6. 世界柔道選手権における勝利傾向の分析 —2003, 2007, 2011年大会の比較—

鹿屋体育大学 中村 勇
鹿屋体育大学 小山田和行
木更津工業高等専門学校 清野 哲也

キーワード：柔道 世界柔道選手権, 勝利傾向, 脚取り技

6. An Analysis of Winning Trends in the World Championships: A Comparison of the 2003, 2007, and 2011 World Championships

Isamu Nakamura (National Institute of Sports and Fitness in Kanoya)
Kazuyuki Oyamada (National Institute of Sports and Fitness in Kanoya)
Tatsuya Seino (Kisarazu National College of Technology)

keywords: judo, world judo championships, winning trend, leg-grabbing technique

Abstract

An Analysis of Winning Trends in the World Championships: A Comparison of the 2003, 2007, and 2011 World Championships

The purpose of this study was to identify recent trends in judo competition through an analysis of the 2003, 2007, and 2011 World Championships. From the official results of the events, the rates of ippon, overtime contests, winning causes, and score-earning nage-waza were analyzed.

For the results of the analysis, the ratio of ippon was highest in 2003 for both men and women., while the over-time ratio was the lowest in the same year for both, but increased in the latter tournaments. For all of the events, nage-waza was the most common winning cause in each of the tournaments for both sexes, holding a 77% winning ratio in the 2007 World Championships for men. For both sexes, there was an increase in the usage of leg-grabbing techniques in 2007 before decreasing in 2011, which may have been largely the result of new rules for judging.

I. 緒言

2003年に改定版が施行された国際柔道試合審判規定（以降、国際規定）ではゴールデンスコア方式延長戦の採用，女子試合時間の変更，試合中医療行為の制限など選手にとって戦い方に大きな影響をもたらすものであった⁴⁾。特に実際，この年開催された世界選手権大阪大会では男女ともにそれ以前の大会とは大きく異なる競技傾向がみられた。特に試合時間が1分延長された女子ではそれまで男子と較べて低かった「一本」取得率が急増し男子と同水準になった^{6) 8)}。

また国際規定で初めて採用された延長戦はそれまでと較べて本戦で勝敗がつかない試合の割合が有意に減少したと報告されている。また当時は延長戦自体も短時間に決着がつく割合が高く，その理由として（1）積極的戦意に欠ける場合の「指導」が比較的早く与えられる傾向にあったこと，（2）罰則適用が早いことから積極的に攻め合う展開が増えたこと，（3）延長戦の戦術が確立していなかったこと，（4）延長戦を戦い抜くための体力が不足している選手が多かったこと，などが考えられていた^{2) 6) 7) 8) 9) 13) 14) 15)}。

2004年アテネオリンピックは全体的に積極的な攻防が多く，国内での評価は高かったが，その後，腰を引いた低い姿勢で相手を警戒しつつ，チャンスを捉えて相手の懐に飛び込んで脚部を抱え上げて投げたり，組み際にタックルを仕掛けたりするレスリングまがいの競技スタイルが流行するようになっていった。特に標準的組み方でない組み手に対する罰則や極端な防御姿勢に対する罰則などの消極的柔道スタイルに対する罰則適用が甘くなったことで，最初から腰を引いて相手の投げ技に対する返し技を狙う戦術が目立ってきた。さらに「一本」の基準がゆるくなり，強さや早さやコントロールが不十分でも背中さえ畳につけば「一本」と判断されるようになるなど柔道の根本的な部分に関わる問題がでてきた^{1) 3) 5) 6) 7)}。

こういった傾向は海外からも上着を着たレスリングという意味の「jacket wrestling」とか低い姿勢で下半身ばかり攻撃する姿から「1 m judo」などと批判されるようになってきた^{10) 11)}。しかし，2008年北京オリンピックまでの主な規定改定は場内外の判断基準変更とそれに伴う赤畳の廃止に留まり，「1 m judo」への対策はオリンピック後に持ち越された。

北京オリンピックが終わるとIJFはこの問題に対処するため，帯から下に対し直接腕や手で掴む行為を禁じる方針を掲げ，試行を行った後に，返し技などの例外は設けながらも原則的に「反則負け」とする厳しい規定改定を行った。この結果，「1 m judo」の問題は解消されたが，「朽木倒」や「双手刈」などの手技がみられなくなり，軽量級が無差別試合で戦いにくくなったなどという指摘も出ていた。また，2008年以降はランキング制度の採用，新しい国際大会システムの採用，敗者復活戦システムの変更など競技制度全般にわたり大幅な変更が加えられてきた^{12) 16)}。

以上のように2003年から2011年までの期間は柔道の競技現場に大きな影響があったが，この期間における競技内容の変遷について分析した研究は少ない。したがって本研究は2003年，2007年，2011年の世界選手権大会の競技内容を分析することにより，近年の国際競技柔道の動向の一端を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

本研究では2003年，2007年，2011年の世界柔道選手権大会について，大会公式記録のデータを用いて分析を行った。2003年は大阪市で，2007年はリオデジャネイロ市で，2011年はパリ市で開催されている。

公式記録は各大会側で依頼した記録係が各試合場において，試合中のすべての得点とその内容

(技／罰則名，発生時間など)のデジタルデータである。これをMicrosoft Excel上で集計した後，試合全体に対する「一本勝ち」の割合(「一本勝ち率」)，全試合における延長戦の発生した割合(「延長戦発生率」)，勝利得点を獲得した要因(「勝利得点獲得要因」)の割合を男女それぞれクロス集計表にまとめ，カイ2乗検定で有意差判定を行い5%水準の有意差が得られた場合はpost hocテストによる各項間の関連性を調べた。さらに得点を獲得した投技(「得点獲得技」)を集計し上位の内容を比較した。

Ⅲ. 結果

試合全体に対する一本勝ち率を3大会で比較したところ，表1のとおり男女とも2003年が最も高く，男子は2011年，女子は2007年が最低であった。女子の2003年と2007年間に有意差がみられ，また男女間では2007年に有意差がみられた。

表1 各大会における一本勝ち率
Table 1 Ippon ratio in each Championships

		2003		2007		2011		
		N	(%)	N	(%)	N	(%)	
Men	Ippon	292	(62.1)	311	(55.7)	**	301	(57.2)
	All	470		558			526	
Women	Ippon	216	(59.3)	* 176	(46.0)	**	193	(52.6)
	All	364		383			367	

* : P<0.01 between 2003 and 2007 in women

** : P<0.01 between men and women in 2007

表2 各大会における延長戦発生率
Table 2 Overtime ratio in each Championships

	2003			2007			2011	
	N	(%)		N	(%)		N	(%)
Men	10	(2.2)	*	38	(7.3)	*	30	(6.1)
Women	15	(4.2)		25	(6.9)		22	(6.0)

P>0.01: between 2003 and 2007 in men

延長戦発生率については表2のとおりであった。男女共に2003年が最も少なく2007年が最高の割合を占めた。特に男子の場合，この2大会間で有意差がみられている。

勝利得点獲得要因については，男女共にすべての大会で「投技」が最も多かった(表3)。特に男子の2007年では77.0%と全試合の8割近くを占めており，2011年との間に有意差が生じている。次に多いのは女子については3大会ともに「固技」，「罰則」の順であったが，男子において2011年だけ「罰則」が上位に位置していた。

表4は各大会における得点を獲得した投技の上位を割合の多い順にまとめたものである。男女ともに2003年は「大内刈」が，2011年には「背負投」が最も多かったが，2007年は男子が「肩車」，

表3 各大会における勝利得点獲得要因の割合
Table 3 Ratio of winning causes in each Championships

	Type	2003		2007		2011	
		N	(%)	N	(%)	N	(%)
Men	Nage-waza	324	(68.9)	423	(77.0)*	324	(67.9)*
	Katame-waza	75	(16.0)	68	(12.4)	67	(14.0)
	Penalty	71	(15.1)	58	(10.6)*	86	(18.0)*
Women	Nage-waza	212	(58.2)	240	(63.3)	203	(60.4)
	Katame-waza	96	(26.4)	74	(19.5)	77	(22.9)
	Penalty	56	(15.4)	65	(17.2)	56	(16.7)

* P<0.01 between 2007 and 2011

表4 各大会における得点獲得技の上位15の比較
Table 4 Comparison of major point-scoring wazas of the Championships

	2003		2007		2011	
	Waza	N (%)	Waza	N (%)	Waza	N (%)
Men	O-uchi-gari	55 (7.8)	Kata-guruma	79 (10.5)	Seoi-nage	78 (14.7)
	Kuchiki-taoshi	52 (7.4)	Seoi-nage	70 (9.3)	Uchi-mata	55 (10.4)
	Seoi-nage	48 (6.8)	Kuchiki-taoshi	69 (9.2)	O-uchi-gari	39 (7.4)
	Uchi-mata	45 (6.4)	Sukui-nage	57 (7.6)	Ko-uchi-gari	34 (6.4)
	Kata-guruma	43 (6.1)	Tani-otoshi	55 (7.3)	Ippon-seoi-nage	32 (6.0)
	Sukui-nage	41 (5.8)	Uchi-mata	39 (5.2)	Sukui-nage	27 (5.1)
	Ko-soto-gari	38 (5.4)	O-uchi-gari	36 (4.8)	Ko-soto-gake	27 (5.1)
	Ko-uchi-gari	31 (4.4)	Sumi-gaeshi	36 (4.8)	Kata-guruma	24 (4.5)
	Ippon-seoi-nage	28 (4.0)	Tomoe-nage	33 (4.4)	Sode-tsurikomi-goshi	23 (4.3)
	Sumi-gaeshi	26 (3.7)	Morote-gari	26 (3.5)	Harai-goshi	19 (3.6)
	O-soto-gari	25 (3.6)	Sode-tsurikomi-goshi	23 (3.1)	Tani-otoshi	17 (3.2)
	Ko-soto-gake	21 (3.0)	Ko-uchi-gari	21 (2.8)	Ura-nage	16 (3.0)
	Sumi-otoshi	19 (2.7)	Tai-otoshi	17 (2.3)	Sumi-gaeshi	15 (2.8)
	Tomoe-nage	15 (2.1)	Kibisu-gaeshi	17 (2.3)	Tomoe-nage	15 (2.8)
	Harai-goshi	14 (2.0)	Deashi-barai	16 (2.1)	Tai-otoshi	12 (2.3)
Women	O-uchi-gari	56 (10.7)	Kuchiki-taoshi	52 (10.2)	Seoi-nage	44 (13.3)
	Uchi-mata	41 (7.8)	Tani-otoshi	49 (9.6)	O-uchi-gari	39 (11.8)
	Sukui-nage	35 (6.7)	O-uchi-gari	36 (7.0)	Uchi-mata	34 (10.3)
	Seoi-nage	32 (6.1)	Uchi-mata	28 (5.5)	Ko-soto-gake	22 (6.6)
	Kuchiki-taoshi	29 (5.5)	Sukui-nage	27 (5.3)	Ko-uchi-gari	19 (5.7)
	Ko-uchi-gari	24 (4.6)	Seoi-nage	26 (5.1)	Harai-goshi	17 (5.1)
	Ko-soto-gari	22 (4.2)	O-soto-gari	25 (4.9)	O-soto-gari	16 (4.8)
	O-soto-gari	21 (4.0)	Ippon-seoi-nage	24 (4.7)	Sode-tsurikomi-goshi	15 (4.5)
	Ko-soto-gake	20 (3.8)	O-soto-maki-komi	23 (4.5)	Sukui-nage	13 (3.9)
	Ippon-seoi-nage	20 (3.8)	Deashi-barai	21 (4.1)	Tai-otoshi	11 (3.3)
	Harai-makikomi	18 (3.4)	Kata-guruma	20 (3.9)	Tani-otoshi	11 (3.3)
	Harai-goshi	17 (3.2)	Soto-makikomi	19 (3.7)	Ippon-seoi-nage	10 (3.0)
	O-soto-maki-komi	13 (2.5)	Morote-gari	15 (2.9)	Soto-makikomi	10 (3.0)
	Kata-guruma	12 (2.3)	Tomoe-nage	15 (2.9)	O-soto-otoshi	8 (2.4)
	Sasae-tsurikomi-ashi	11 (2.1)	Sode-tsurikomi-goshi	11 (2.2)	Ura-nage	6 (1.8)

女子が「朽木倒」であった。「朽木倒」については男女共に2003年と2007年には施技数の上位であったが2011年にはこの表外に低下した。脚部を掴んで投げる、もしくは投げる事が多い投技として「朽木倒」「肩車」「掬投」「谷落」「双手刈」「踵返」の6技を「脚取り技」として選び表中で拾い出してみると、男子は2007年が6技で他大会が3技ずつであり、女子は2007年が5技、2003年が3技、2011年は2技であった。

IV. 考察

本研究により2003年は一本勝ちが多く延長戦が少ない大会であった。ゴールデンスコア方式の延長戦の採用や罰則適用傾向が強かったことなどから、なるべく本戦内で決着をつけようとする選手の考えがあると考えられるが、負傷時に医師の診察を受けるふりをして休息が取れなくなったことや女子の場合は試合時間が1分間延びたことでスタミナなどの体力差が大きく現れたことなどが影響したのではなかろうか。また「一本」の判定が比較的甘かったことも一因にあると考えられる。

2007年当時は「1 m柔道」が問題になっていた時期であり、「肩車」「朽木倒」「掬投」「双手刈」など低く潜り込んで脚を取って投げる技が得点獲得技の上位に上がってきている。また「一本」が減少し延長戦が増加しているが、全体的に脚を取ろうとしたり、返し技を狙ったり消極的で思い切った攻防が少ない試合スタイルが多かったことを示唆している。

2011年は2007年と得点獲得技の動向に大幅な傾向の差がみられた。特に「脚取り技」が男女共に減っていた。これは審判規定改定による影響が大きいと考えられるが、「朽木倒」や「双手刈」等が上位リストから消えたのに対し「掬投」や「肩車」や「谷落」は残っている。「掬投」は新規規定で認めている返し技など「後の先」で用いることが可能であり、「肩車」「谷落」は脚を掴まない掛け方が工夫され実用化されてきたことを反映していると考えられる。

今回、2003年、2007年、2011年とそれぞれ4年間の間隔で「脚取り技」が急増し、また急減したことが明らかになった。例えばヤシュケビッチ選手が考案したとされる「腕挫十字固」へ展開する技法は70年台以降欧州選手を中心に広く流行した。またそれを得意とした選手名が俗称としてついた「ハバレリ投げ」は現在「帯取返」として新しく命名されるなど90年台後半に頻繁にみられている。このようにある選手が工夫した技法が試合や合同練習を通じて全世界に広がるケースはこれまでもあるが、今回のように複数の投げ技群が特定期間のみ急増するケースというのは過去に経験がなく、またそれまで罰則の対象であったり技の効果が認められない倒し方であったりするものもあることを考えると、やはり国際規定の変更の影響が大であると判断すべきであろう。もっとも、2011年の場合は国際規定改定の影響であることは容易に推察できるが、2007年の増加については国際規定の公的な改定ではなく、本来禁止事項であった極端な防御姿勢やすぐに効果を発揮しないような脚取り行為を見逃すような審判傾向があったと考えられる。またアテネオリンピックで躍進した日本選手の「内股」などの足技に対し「掬投」や「後の先」の技が有効であったことなどから、選手側の研究が進み世界規模で一気に普及していった可能性もある。近年は国際大会や国際合宿、またコーチセミナーなどが増加し選手や指導者同士の技術交流が増えたり、IJFの大会映像ネット配信の充実により途上国でも最新の競技動向が入手できるようになった。このように新しい技術動向は短期間のうちに世界中で共有されることは現代柔道の特徴とも言える。

延長戦については2003年の導入当初は比較的少なく選手の敬遠傾向がみられたがその後は6

%前後まで増加している。延長戦は旗判定の不明瞭さやそれを狙った消極的な試合展開を改善するために導入して当初は効果を上げるが、時間が経つにつれ最初から延長戦を計算に入れた間延びした試合展開が増加する問題がある。国際規定においては延長戦の歴史は浅く今後もその動向を注目していくべきであろう。

ロンドンオリンピック後の2013年には下半身への直接的攻撃、組み手の制限、延長戦の方法などに関する新しい国際規定改定案が試行される。今後はさらに新しい試合データを追加し分析を継続し、国際競技柔道の動向を明らかにしていく必要がある。

引用文献

- 1) 石川美久他, 世界柔道選手権大会における外国人選手の競技傾向－1995年と2005年の比較－, 柔道科学研究, 14, p.1-6, 2009.
- 2) 小俣幸嗣, 大会観戦記, 柔道, 74 (11), p.48-50, 2003.
- 3) 小俣幸嗣, 審判員がみた世界選手権大会, 柔道, 76 (11), p.46-47, 2005.
- 4) 松下三郎, 藤田真郎, IJF総会報告, 柔道, 74 (11), p.60-68, 2003.
- 5) 村田直樹, 大会観戦記, 柔道, 76 (11), p.48-50, 2005.
- 6) 中村勇, アテネ五輪をデータで解く／前編, 近代柔道, 304, p.58-61, 2004.
- 7) 中村勇, データで見る最近の世界選手権の傾向, 柔道, 75 (8), p.86-91, 2004.
- 8) 中村勇他, 2003年世界選手権大会の競技分析－1995～2001年大会との比較, 柔道科学研究, 9, p.1-6, 2004.
- 9) 中村勇他, 2003年世界柔道選手権大会の競技傾向の分析－男女の比較－, 講道館柔道科学研究会紀要, 10, p.77-85, 2005.
- 10) 中村勇, データで読むリオデジャネイロ世界選手権, 近代柔道, 341, p.48-51, 2007.
- 11) 中村勇, データで読むリオデジャネイロ世界選手権, 近代柔道, 342, p.46-49, 2007.
- 12) 中村勇, データで読む東京世界選手権, 近代柔道, 377, p.36-39, 2010.
- 13) 岡田弘隆, 大会を終えて, 柔道, 74 (11), p.42-43, 2003.
- 14) 大阪世界戦を振り返る インタビュー吉村和郎, 近代柔道, 294, p.26-27, 2003.
- 15) 大阪世界戦を振り返る インタビュー川口孝夫, 近代柔道, 293, p.30-31, 2003.
- 16) 吉村和郎, 大会総評, 柔道, 82 (11), p. 56-58, 2011.